

# かずさの博物誌

## ノビタキ(野鶉)

～秋の草原は  
渡りの中継地～

文・写真／成田篤彦

先年の秋、盤洲干潟に行った。好天だったが、砂が飛ぶほどの強風であった。そのせいか干潟に野鳥がほとんど現れなかった。「野鳥と会えず残念」と思いつつ海岸沿いのアシの原野の中の小道を戻ってきた。すると灌木の枝先に一羽の薄茶色の小鳥が止まっていた。頻繁に近くのアシの葉の頂に飛び立っては元の枝先に戻ってくる。種名がわからないまま急いで、シャッターを切った。凶鑑で調べると冬羽のノビタキであった。しかし、強風でピントが少しずれていた。



©成田篤彦

▲ノビタキ ツグミ科。大きさはスズメくらい。本州の高原や北海道の平原で繁殖。冬は東南アジア地方に渡る。上総では渡りの途中、春と秋に通過するが、秋の方が多い。2008年10月13日 木更津市(筆者撮影)

ノビタキと言え、かつて上総地方に赴任したころ、夏季に八ヶ岳山麓の野辺山高原の荒地で見かけたことがある。荒地はなだらかな斜面に

ある牧場跡であった。草丈が腰くらいの高さで、その中に背の高いセリ科の白い花やマツヨイグサやハシバミなどのなまこやシラカバの幼木などが点々と生えていた。ホオアカが道ばたにあるシシウド類の白い花の先端でさえずっていた。その時、道から少し離れたシラカバの幼木付近でスズメ大の小鳥が2羽もつれあうように飛んでいるのを見た。1羽は頭や背が黒色、もう1羽は黄褐色であった。前者がノビタキの雄で後者が雌。雄は近づくたびに飛び去った。しかし、雌はガの幼虫をくわえ、マツヨイグサの枯れた茎の頂に止まったままであった。さらに近づくと「逃げるか?」と思ったが、動かすこちらを見ている。私がカメラを向けても飛び去ろうとしない。「おかしい」と思って、少し離れて腰をおろすと草の根元に素早く潜り込んだ。小石がごつごつある地面にお椀のような巣があった。「中にヒナがいた。だから逃げなかったのか?」と思っただけでその場所を去った。

それから、もう37年が過ぎた。先年の秋に見たノビタキは羽毛の色彩が目立たない橙黄色で全く違っていった。これでは素人の私がノビタキと気づくわけがないと思った。さて、彼らは丈の高い植物の頂に止まる癖があるから、盤洲の原野で探せば、また撮影できるかもしれないと思いついた。翌日、海岸の原野に再び赴いた。背丈が2m以上もあるアシやセイタカアワダチソウやスキガビシリ生える草むらをかき分けて歩いてみると、藪の中から「ヒッ、ガッ、ガッ、ヒッ、ガッ」と鳴き声が聞こえた。「あ、ノビタキの声?」と思った。腰をおろして、彼らがその周辺で好んで止まりそうな一番背丈が高いセイタカ



©成田篤彦

▲ノビタキの雌 草の頂に止まり虫などをとらえる。草の根元や地上のくぼみなどに巣をつくる。1972年8月2日 長野県野辺山高原(筆者撮影)

ところから、もう37年が過ぎた。先年の秋に見たノビタキは羽毛の色彩が目立たない橙黄色で全く違っていった。これでは素人の私がノビタキと気づくわけがないと思った。さて、彼らは丈の高い植物の頂に止まる癖があるから、盤洲の原野で探せば、また撮影できるかもしれないと思いついた。翌日、海岸の原野に再び赴いた。背丈が2m以上もあるアシやセイタカアワダチソウやスキガビシリ生える草むらをかき分けて歩いてみると、藪の中から「ヒッ、ガッ、ガッ、ヒッ、ガッ」と鳴き声が聞こえた。「あ、ノビタキの声?」と思った。腰をおろして、彼らがその周辺で好んで止まりそうな一番背丈が高いセイタカ

参考文献 千葉県2002「千葉県の自然誌本編6」